

Contents

| | |
|----------------------------|----|
| 命の橋 | 1 |
| 研究成果発表会 | 2 |
| 「実践のための性教育セミナー」2004年度報告 .. | 5 |
| web NEST リニューアル | 7 |
| 「READING」@dista | 8 |
| WAVE さっぽろ 2005 | 9 |
| 活動報告 | 9 |
| お知らせ | 12 |

命の橋 ~抗HIV治療に届かぬ世界の仲間たちのために~

ウイルスの活動をおさえしてくれる抗HIV薬は陽性者の命を明日へと繋ぐ架け橋のようなもの。アジア・太平洋の途上国ではこれらの薬による抗HIV治療がいままさに始まろうとしています。そしてこの重要な時期に開催される第7回アジア太平洋国際エイズ会議のテーマは「Bridging Science and Community/科学とコミュニティの英知の統合」。ここでは私たちひとりひとりが未来への架け橋なのです。

日本 HIV 陽性者ネットワーク・ジャンププラス 代表 長谷川 博史

幾千万の溜息は一夜のうちに雨となり
瞬くうちに河となった
河はいつの間にか人びとの前に流れ出し
やがて大河となって行く手をさえぎった

薄墨色の夜明け前
遥かな地平線が曙に染まる
人は河辺に立ちつくし
明けぬ夜明けの中でどれほど待ちつづけて
いるのだろう
河を渡る術がないわけではない
幸運に恵まれた少しの者たちはこの河を
渡っていく

しかし
明日の糧さえ無い貧しい女ゆえ
いわれなき誹りを受けた男ゆえ
そして無力な幼き者であるがゆえ
行く手をさえぎる川を越え
遥か彼方の曙に
渡る橋がない！

こころ穏やかに
人は誰かを愛しただけなのに
こころ穏やかに
人は誰かを愛しただけなのに
流れ早める河を越え
遥か彼方の曙に
渡る橋がない！

幾千万の溜息は
一夜のうちに雨となり
そして幾条（いくすじ）もの川となり
瞬くうちに大河となって
未来への行く手をさえぎっている

どこか遠くの街では
楽しげに笑いながら
人びとは河に架かったいくつもの橋を
行き来する

なのにここでは
いつまでも明けぬ夜明けのその底で
人はどれほど待ちつづけているのだろう
この河を超えて歩いて行きたいのに
新しい朝へつなぐ橋がない！

薄墨色の夜明け前
それでも人は立ち上がる
遥か彼方の新しい朝を迎えるために
命あふれる森を吹き抜ける
ひとすじの風となるために
それでも人は歩き出す

明けぬ夜明けのその底で
誰かがつぶやく
低く
しかし力強く
「橋を架けよう！」

たとえこの河がどれほどの大河でも
あしたに続く新しい橋を架けよう
遥か彼方の地平線まで
朝焼けに染まる曙の
未来へ繋ぐ橋を架けよう

生きる糧さえなくした女たちのために
いわれなき誹りを受けた男たちのために
夜の暗さに泣く子供たちのために
橋を架けよう！

幾千幾万の溜息は
いつしか幾億の微笑みとなり
心を繋ぐ糸となる
人の心が繋がれば
見えぬ思いも形となり
やがて命の橋となる

薄墨色の夜明け前
遥か彼方の曙へ
大きな橋を架けよう
あした生まれる子供たちの時代へと
渡る時間の橋を架けよう

生きる糧さえなくした女たちのために
いわれなき誹りを受けた男たちのために
夜の暗さにおののく子供たちのために
今日の命の橋を架けよう

研究成果発表会「HIV陽性者の療養生活と就労」全国ツアー!

HIV陽性者の就労状況についての調査が、全国5カ所の専門病院の協力により実施されました(厚生労働科学研究事業主任研究者:木村哲)。この調査結果を地域に還元すべく、全国4カ所で成果発表会を開催。多彩なゲスト、就労支援に関係する多くの方々が参加し、画期的な全国ツアーとなりました。

(主催:(財)エイズ予防財団 分担研究者:小西加保留 運営:ぶれいす東京)

全国の成果発表会と協力病院のナースからの一言

●大阪

2004年11月20日(土) @国立病院大阪医療センター
「調査報告」若林チヒロ/小西加保留(研究班)
「HIV感染症と就労」白阪琢磨(大阪医療センター医師)
「医療機関における就労支援」

織田幸子(大阪医療センター看護師)
「職場で感染を知らせた経験から」佐藤幹也(陽性者の立場から)
「障害者雇用枠での採用経験から」人事担当者(外資系企業A社)

大阪での成果発表会では、医師、看護師、患者、企業の人事担当者等、それぞれの立場からの就労に関する発表と調査の中間報告がありました。参加者の中には行政・患者の参加もあり、会はとても有意義なものでした。

注目されたのは、企業の人事担当者の話です。一人の社員として迎えるに当たっての考えと職場へのHIVという感染症の理解をどのように伝え現在に至ったかという事です。

HIV感染は、「医学的には就労には支障なく、就労の支障は、雇用者の偏見と差別のなにもものでもない」と白阪先生は述べていました。要はその会社がどのような人材を求めているのか、本人と会社のニーズが合えば個人の能力を認め採用すべきです。支援的で安全な職場環境は本人自身が健康を維持しながら、会社や社会への貢献へと繋がると考えます。
(大阪医療センター HIV/AIDS先端医療開発センター HIV/AIDSコーディネーター 織田幸子)

●福岡

2004年11月17日(水) @国立病院機構九州医療センター
「調査報告」若林チヒロ/小西加保留(研究班)
「最近のHIV感染症に関するトピックス」

山本政弘(九州医療センター医師)
「医療における就労支援」

本松由紀(福岡県派遣ソーシャルワーカー)
「障害者雇用と職場のプライバシー」矢島嵩(陽性者の立場から)

患者支援を行なっている立場として、感染判明後に離職/転職経験約35%も生じているとは意外でした。就労については保険使用等での職場への病名漏洩など現状説明し、不安軽減への支援は行なっていますが、就職用の健康診断書の問題や職場への病名告知のデメリットも含め、課題は大きいのが現実です。

服薬治療を続けながら社会生活を送っておられる患者さんへの支援について改めて考えさせられる研修でした。
(国立病院機構九州医療センター 城崎真弓)

●札幌

2005年2月13日(日) @北海道大学 学術交流会館
「調査報告」小西加保留/若林チヒロ(研究班)
「HIV感染症と就労」小林寿美子(北海道大学病院医師)
「HIV感染症の就労支援—MSWの立場から」

高田いずみ(北海道HIV/AIDS医療社会相談業務)
「職場で感染を知らせた経験から」佐藤幹也(陽性者の立場から)

HIV感染患者さんから、就労に関して相談を受ける機会があります。相談内容は、健康管理や体力的なこと、病名漏洩への不安等です。職場に病気を隠しての通院や服薬継続の大変さ、職場に伝えたため疎外された等がある反面、上司がサポートしてくれる職場などの話も耳にします。

そこで、身近にいる医療者に、就労相談のみでなく、困った時には、話をしてください。一緒に考えていくことで、ヒントが見つかるかも知れません。また、医療者からも患者さんへ声をかけていく大切さを報告会に参加して改めて感じました。
(北海道大学病院 HIV担当看護師 大野稔子)

●東京

2005年3月11日(金) @ハイライフプラザいたばし
「調査報告」若林チヒロ/小西加保留(研究班)
「HIV感染症と就労—医師の立場から」根岸昌功(駒込病院医師)
「HIV/AIDS患者への療養継続支援と就労支援」

島田恵(国立国際医療センターACCコーディネーターナース)
「職場で感染を知らせた経験から」佐藤幹也(陽性者の立場から)
「障害者雇用枠での採用経験から」人事担当者(外資系企業A社)

調査、おつかれさまでした。感染者の方の置かれている現状をよく反映した結果だと思いました。

当院に通われている方の中にも、受診のために有給休暇を取りたいけれど、職場側から理由を詮索されて困るという方がいらっしゃいます。でも、そもそも有給休暇は労働者の権利のほうです。いちいち理由を報告する必要のあるものではありません。個人の責任において休暇くらい自由に使えるような、成熟した社会であって欲しいと切に願っています。(東京大学医学研究所付属病院相談室 看護師 村上未知子)

コーディネーターナース(医療者)としての就労支援は、外来で行っている服薬開始まで・開始後の相談対応・指導のプロセスです。A社さんのお話から、このプロセスが「患者—医療者間のコミュニケーションプロセス」であることを再認識しました。また、就労を通して患者が医療福祉資源の「消費者」であるだけでなく「供給者」でもあることによって、HIV感染症や患者が理解される社会基盤をつくることにつながると思っています。これは「患者は勇気をもってもっと打って出るべきではないか」というフロアからの意見に通じるものだったと思います。患者が打って出るほど遅くあるために、医療者として療養継続を支援していきたいと思いました。

(国立国際医療センター エイズ治療/研究開発センター(ACC) コーディネーターナース/看護支援調整官 島田恵)

「療養生活と就労に関する調査」の意義

小西 加保留



HIV 感染症は、医療の進歩により、長期生存が可能となり、早期に感染に気づき、適切な医療を受けることによって、多様な社会生活を営むことが可能な時代となった。HIV 陽性者の多くは、稼働年齢期にあり、ごく普通に地域での社会生活を継続している、あるいは継続を望んでいると考えられる。一方で、市民生活の中では、HIV 感染症が語られることは少なく、一般的な知識は比較的普及したものの、まだまだ身近でなく、どのように接したらよいか分からない怖い病気というイメージが払拭されているとは言いがたい。他方、社会施策としては、1998 年の身体障害者福祉法により障害認定がなされ、種々のサービス利用への道が開かれたが、手帳の利用は、病名開示に繋がり、病名を容易に開示できにくい社会の中では、様々な生活の場面で制約感が伴うことが予想される。

この調査は、以上のような現状に鑑み、HIV 陽性者の就労状況と療養生活について、全国 5 箇所の専門病院の協力を得て、566 名の当事者の方から回答をいただいた初めての全国的調査である。その結果、就労にまつわる身体的心理的社会的状況を初めて明らかにすることが可能となり、今後の支援の方向や課題などが抽出できた。当事者側においては、健康管理、プライバシー、病名開示への自己決定などの課題があり、就労支援者、企業、市民ら社会の側には、病気への無関心や無知などの問題が大きく残されている。就労支援に関わる人に限らず、地域で生活する全ての人が、自分の問題としてこれらの課題に向かい合うために、この調査結果が活かされることを期待している。

ご協力いただいた病院、回答いただいた当事者の皆様には、心から感謝の意を表したい。

研究調査発表を終えて

若林 チヒロ



HIV 陽性者の就労や社会生活に関する調査はこれまであまり行われてきませんでした。治療の見通しが開けたのはこの数年のことですから仕方がないのかもしれませんが、病気をコントロールしてどう生きるか、どう生活していくかが陽性者自身には大切なのではないかという思いから、この調査に参加させてもらいました。

今回の調査は、働いていない人の問題だけではなく、働きやすい条件とは何か、仕事をしたいと思っている人が働き続けられる環境とはどのようなものなのかも検討したいという目的がありました。結果からは、職場の意識や質の問題が浮かび上がります。

働いている人に就労上の困難感を尋ねた項目では、39%の人が「病名を隠すことの精神的負担」を、28%の人が「HIV 感染症に対する無理解や偏見」を「強く感じる」としており、「身体的なことや体力的なこと」を挙げた人の 21% や、「通院のしにくさ」や「服薬のしにくさ」を挙げた人がそれぞれ 1 割前後であるのと比べて高率でした。身体的なことや健康管理よりも、病名を隠す負担や周囲の偏見が陽性者の働きやすさを左右しているらしいという結果は、医療者からも意外だったという声がきかれました。

病名を言いにくいために支援を得にくく仕事上無理をする

こと、HIV に対する同僚の知識のなさや安易な差別的発言が働きづらくするという状況は、HIV に限らず病気をもつ人に対して職場がどう対応するかの反映でもあり、職場の質の高さにも関連しているのだと思いました。

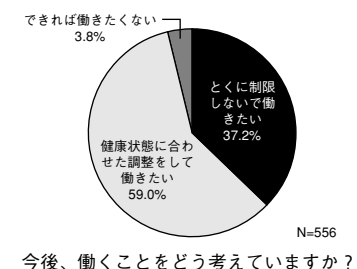
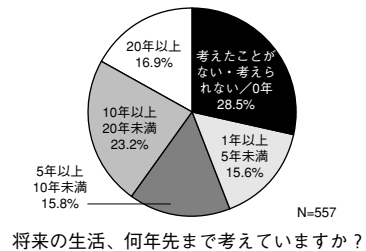
しかし、かならずしも否定的なことばかりではありません。職場の誰かに病名を知らせている人は働いている人のうち 27% おり、同僚や上司、雇用主などで個人的に信頼できる人に伝えていました。病名を伝えたことで否定的な反応や影響があったという人は数% とごくわずかで、伝えた人の 50% が「精神的負担感が軽減された」、42% が「通院や服薬が楽になった」と肯定的な評価をしていました。

HIV 感染がわかって以後に離職や転職をした人は就労経験者の約 3 分の 1 いましたが、その理由は「体力的なこと」が離職転職経験者のうち 42% ともっとも多いものの、22% は「仕事より健康や生活を重視した」としていました。感染をきっかけに価値観や生活・人生に対する考え方が変化して自分に適した働き方を探している人も多いようです。

現在の職場評価としても、就労者の 70% が「仕事のやりがいや面白さ」を、61% が「職場の人間関係の良さ」を感じており、全体的には働きやすさを感じている人も多いことが分かります。

また、今回の調査については医療者がとても熱心に協力してくれました。このテーマに対する問題意識も高かったのでしょう。調査対象の各地域で結果報告会を開催した際、ある医師は、働ける状態でも就労に結びついていない患者さんもおりとても気になっているけれど、患者の働き方や生活に関わることは医療の領域ではないのではないかと、口出することに躊躇を感じているということをお話してくれました。調査結果では、就労や就職について半数以上の人がある程度の医療者に相談しており、相談のニーズはあることが伺えます。現状では公的な就労相談先はどれも数% しか利用されていませんでしたが、就労・雇用分野の資源を活用することも、特に就職先を探している人には必要です。HIV の場合病名を開示しにくいことや体調の変化が安定しないことから医療者が窓口になっている現状があるようですが、医療者が患者の生活や働き方にどのような関わり方をするのが良いのかは慎重に検討していく必要がある課題だろうと思います。

仕事や職場のことは、個人で対応できること、対応すべきこともありますが、広く職場での理解を広めることや基本的なプライバシー管理対策を徹底することは、個人で対応できる範囲を超えている面もあります。今回の調査結果をみていて、病気や障害を持つ人、とくに病名を明らかにしにくい病気や障害をもつ人への行政や企業、広く社会の対応が問われている課題なのだと感じました。



「ボジとして話すこと」

佐藤 幹也

HIV 陽性者として、勤務先に感染を知らせた経験を話して欲しい…そう依頼頂いた時、あまり深く考えずに承知しました。それは、その問題が自分にとって既に過去のものであると認識していたせいでもあるでしょうし、不特定多数の前で自分が陽性者であると語ることに、何ら抵抗を感じていなかったせいだと思います。

しかし、実際に合計3回のスピーチを通して得た気持ちは、話す以前とは違ったものでした。当時の記憶を改めて甦らせ、決して今もそれが解決した訳ではないのが分かったこと、そして会場でそれを確認する時間を共有して下さった方々からの反応が、自分の置かれた状況のシビアさをさらに教えてくれました。陽性者当事者が抱えている就労への悩みは、様々な方面から耳に入ります。勿論ケースバイケースでしょうが、そんな中の一事例として、生の声で伝えられたことに意義があったのかな…と多少自負しています。

初めてで、少々戸惑い気味だった大阪、生まれ故郷であることもあって、少し感慨深かった札幌、そして現在の居住地東京。会場の様子はそれぞれでしたが、終了後のアンケートの言葉に、ああ、話して良かったと思えるものがたくさんありました。内容が内容だけに、どうしても事実を淡々と語ることになってしまいましたが、それがかえてアピールした部分もあったようで、「一日も早く笑顔が戻りますように」とコメントして下さった方もいました。

業務の制限、賃金の実質カット、上司の無理解、差別的発言…決して甘くはない現状ですが、社会での自分の存在意義を見出し、これからは頑張って行こうと思えた貴重な体験であったことは事実です。自分の経験を大勢の人の前で語ることで、自分自身の再発見を行うことができました。このような機会を与えて下さったことに感謝しています。ありがとうございました。

「偏見払拭への輝くステップ」

外資系企業 A 社 人事担当者

私は、HIV 陽性者に対してきちんと対応し受け入れている企業として、最近持ち上げられている A 社の人事担当者である。我々としてはそうする以外の何もありませんから、そうしているのですが、この国では、まだそのような企業人は少ないと聞く。本当か？うそだろうか？と実は思う。しかし、感染者の実体験を聞くにつれ、やっぱりそうかも、とも思う。

ではなぜ、自分たちはそうできるのか。それは単純で、HIVの感染力は弱く、感染経路が限定的で、職場の通常の接触では感染しないことがわかっているからである。

でも、そのくらいのことであれば、もはや正しい情報がかなり出回っていて、知っている人も多いだろう。なのになぜ偏見が存在するのか。理由を二つ思いつく。ひとつは、「そうはいつでもやっぱり怖いよ。なんかあったらやばいじゃん」的な、根拠はないけれどぬぐえない不安。二つ目は、全国の HIV 陽性者の半数以上を占めると言われている、同性愛者に対する偏見。

ぬぐえない不安への処方としては、HIV感染者と周囲とのまともなかかわりあいの、生の具体情報を増やすことを提案する。彼らの友達とのつきあい、結婚生活、スポーツ活動、職場、学校などでの、あたりまえ、もしくは良い話を探し出して、たくさん世に出すのである。狙いは、彼らと普通に接していて、実際に何の問題もない人のことを知らせることにある。たとえば私は、自分のお会いした陽性者がよくプールに行くということを聞いて、安心と親しみが増した記憶がある。本人達の安全性を必死で説明するより、彼らの具体的姿やそ

の周りにいる人達のことをサラッと語ったほうが、もっと遠くにいるよく知らない人々には効果的ではないだろうか。

一方、同性愛に対する偏見には、まだ処方が思い浮かばない。よって考え方を述べてみよう。企業としては、事業に対する貢献とそのために必要な資質において社員を判断するのであって、それ以外のことでは判断しない。「別にいいじゃん」である。加えて、同性愛者であるとの理由で排除しては、会社はせっかくの人材を無駄にすることとなり、損だ。もっと言えば、ダイバーシティの前提である、世の中はいろいろな人で成り立っている事実を素直に受け止めれば、同性愛者も、異性愛者と同じ意味を持つ世の中の構成要素であって、それ以上でも以下でもない。そう考えれば偏見を持つ理由がなくなる。

しかし、どうも、このように単純に考える人はまだ少ないらしい。なるほど。だとすれば、どうすれば皆が単純になれるかを考えるのが、A社の人事担当者としての私の次のステップであろうか。

◆参加者より

「HIV 陽性者の就労支援について」研究成果発表会と私

さとう いくお

3月11日、東京の板橋で行われた研究成果発表会の会場に私は足を運びました。友人たちと団欒の後、TVカメラが入ったので、少しの緊張感。研究班、医師、コーディネーターの発表が終わり、陽性者からの発表に。同じ立場の方の内容に、ついつい引き込まれました。とても丁寧な発表で、感染告知から彼自身の苦悩、会社の上司から本会社に伝わるまでの意外な展開、そして会社との闘い。彼程ではないにしろ、自分も偏見と差別に遭ってきたので、同感し、頑張れ！って気持ちでいっぱいになりました。

次にぶれいす東京の生島さんから、「悪い例ばかりではなく、良い例もある」との紹介の後、外資系企業A社(人事担当)さんからの発表に。障害者枠での採用の話でしたが、企業のしっかりした理念のもと進められた採用、上層部には理解されても、同僚の動揺があり混乱状況に。それでも軸のブレない会社の対応に、心の中で拍手喝采。主治医のレクチャーまでして、配属部署の理解を育む姿勢には感動し、涙が溢れ出ました。勿論当事者やその周囲の方々の強い意志と努力があってこそその結果だとは思いますが、世の中にこういう会社や人々がいることに勇気づけられました。

HIVを取り巻く環境は、まだまだ大きな偏見や差別を抱えています。陽性者が少しでも暮らしやすい環境にするため、私も小さな声を上げようと、心を新たにしたい一日でした。

「免疫機能障害者の就労に関する勉強会に参加して」

グラクソ・スミスクライン株式会社 人財開発部

小口 浩一郎

「HIV」と聞いて、今までは「自分には無関係」という感覚が漠然とあった。今回この会に参加させてもらい、実は「HIV感染症」という病気について実態を何もわかっていないことを認識した。感染者の方々が、病気のこと、そして社会との関わりについていろいろと考え、そして悩んでいることを知り、我々が社会の一員としてこれからしていかなければならないことがぼんやりとはあるが、見えてきたような気がする。私自身、製薬会社で採用担当者として働いていることから、企業としていかに感染者の方々と共に環境づくりをしていくべきかを考えるきっかけとなった。A社さんの経験を聞き、当社としても是非受け入れに向けて積極的に取り組みたいと考えるようになった。今後、このような会が活発に行われ、社会全体としてこの病気についての認識・理解を深めていくこと、そして感染者の方が社会の中で自らの力を発揮できることを目指していければと思う。

「実践のための性教育セミナー」 2004年度報告

昨年度に続きこのセミナーは、(財)日本性教育協会(JASE)が主催し、ぶれいす東京が企画・運営を担当して開催されました。全国からのべ83名が参加、修了しました。

主なプログラム

2004年8月22日(日)

挨拶:「セクシュアルヘルス=ケア」

講義:「性教育概論～禁欲VS.包括的性教育」池上千寿子

ワーク:「セックスの価値観」

ワーク:風船&品評会、バレーボール、すごろく

講義:「世界の情勢等～WHOビデオの解説」池上千寿子

講義:「エイズ会議報告等」兵藤智佳

8月28日(土)

講義:「セクシュアルヘルスへのアプローチと課題」徐淑子

講義&ワーク:「プライバシー」生島嗣

ビデオ上映:「Let's CONDOMing」

ワーク:「『からだ発見』の導入」池上千寿子

ショータイム:野坂祐子

2005年2月5日(土)

ワーク:「自己紹介」野坂祐子

講義:「セクシュアルヘルスとは何か」池上千寿子

ワーク:「身近なセクシュアルヘルスの問題

～ジェンダーの視点から～」野坂祐子

講義:「セクシュアルメディアリテラシー」東優子

(ビデオ分析の結果から)

2005年2月6日(日)

アイスブレイク:「経験者を探せ!」

ワーク:「問題発掘～問題解決としての連携～」

講義:「社会資源の活用と連携」兵藤智佳

ワーク:「援助の方針:高校生の事例」生島嗣

まとめ:「プライバシーとは」池上千寿子

2004年度 JASE 性教育のための実践セミナー 報告 ～セクシュアル・ヘルスの気づきから工夫へ～

野坂 祐子

「性教育をもっと楽しく、もっと豊かに実践してみませんか?」—そんな呼びかけに、全国各地から参加者が集った。昨年度に続き開催された、この「性教育のための実践セミナー」は、日本性教育協会(JASE)が主催し、ぶれいす東京が企画、運営にあたる。キーワードはセクシュアル・ヘルス。性教育の実践に取り組む方々が、セクシュアル・ヘルスを「教える」ためではなく、まずは「自分の問題」として捉え、その「気づき」を各自の実践の「工夫」につなげていくことが、このセミナーの目的である。ワークを中心とする体験型学習が多くを占め、「教わりたい・覚えていきたい・習いたい」というセミナー受講生の三大姿勢(?)は、「性教育って…教わるものじゃないの? 頭じゃなくて体で感じるの?? 自分で考えなきゃいけないの??」の三大疑問(!)に転換される。教わるのではなく自分で考える、という学びに対する意識の転換は、なかなか難しいようだ。しかし、最初は戸惑いをみせていた受講生たちも、体験を共有す



グループワーク

るにつれ、徐々に自己開示が進んでいく。2年目を迎え、ますます充実してきた「実践セミナー」。その内容をご報告しながら、運営スタッフの裏話もチラリとご紹介しましょう。

このセミナーは、8月のコースⅠと2月のコースⅡからなり、各コースは連続2日間。通年で両コースに参加すると、約27時間の受講となる。受講者は、各コース30名程度に限定し、少人数で密度の濃い(さらには講師のキャラも濃い?)学習を行うのが特徴である。対象は、地域や学校で性教育や若者の性の健康に関する予防介入に取り組む方々だ。このセミナーは、厚生労働省エイズ対策研究事業のなかの一つの柱、「介入実践のための人材育成」として行われ、プログラムはぶれいす東京による調査研究や実践から得たホットな知見に基づくのがユニークな点である。毎回、遠方からの参加者も多く、リピーターもちらほら。会場であるJASEの資料室も、この時ばかりは性教育実践者の社交場(セブな感じでしょ)に早変わり。学習内容だけでなく、このコミュニケーションが目当てで参加する方も少なくないかも。このセミナーでは、自己への気づきはもちろん、他者との関わりをととても大切にしている。一緒に体験を共有し、意見を伝え合うこと。それが、性教育やケアにおける「連携」の基盤となるのだ。

そう、今年度のセミナーのもう一つのテーマは、セクシュアル・ヘルスの教育的介入と支援のための「連携」。連携とは、一人で抱え込まず、みんなで知恵を出し合うための仲間づくりの意味だけではなく、さまざまな人や組織を活用しながら、よりよい新たなものを生み出す動きのことをいう。そして、従来は教育の「対象」とみなされていた若者も「当事者」、つまり主人公として重要な役割を果たしてもらおう。このように当事者を交えた連携づくりの視点を持つことが、今回のセミナーのポイントなのである。

具体的なプログラムは別記のとおり。コースⅠでは、ゲームや教材づくりなど楽しいアクティビティを行いながら、性に対する価値観を見直す。ワークで他者の意見を聞く経験は、講義よりもリアルに性の多様さや異なる価値観の存在を実感できるだろう。そうした個人の意識に目を向けながら、HIV/AIDSやセクシュアル・ヘルスをめぐる世界の動向についての最新の情報が提示される。アジアやアメリカの実情を知ること、日本の、そして個人の体験を再認識する機会になればと思う。コースⅡでは、より実践的に、事例をもとにした連携のシミュレーションを行った。ポイントとなるのはプライバシーと支援。どのように個人情報を守りながら、連携して支援につなぐか。実際の対応を想定すると難しい問題であるが、その困難さを理解することは重要だと思われ

る。両コースとも、交流のためのランチタイムが設けられ、リラックスしながらも刺激的な時間を過ごせた様子。セミナーの終了時には、スタッフの兵藤智佳氏による“3分でまとめる今日の総括”。一部のファンの要望により(?)恒例化しつつあるこのコーナーで、計4日間のセミナーは修了となる。

こうしたプログラムの開発は、実は、綿密な計画に基づいている。今回の企画、運営にあたっては、数十時間をゆうに越える議論を重ねて準備している。ワークひとつとっても「なぜ、それを行う必要があるのか?」を話し合い、プログラムが決まりかければ「この学習には、この流れでよいだろうか?」と見直していく。こうした話し合いそのものが、性教育やセクシュアル・ヘルスの問題を考えていく大切な過程と考えている。

とはいえ、正直言って準備だけでもうクタクタ…。なんて油断してはならないのが、ぶれいす東京のキケンなところ。最近では、セミナー当日のファッション・チェック(特に露出傾向あり)に火花を散らし、ワークの司会にかこつけて自己アピールに精を出すスタッフも出現!「介入のための人材育成」と題するこのセミナー、ぶれいす東京の豊かな人材開発の場にもなりつつある模様。嬉しいことに、来年度の継続開催も決まり、さらにパワーアップしたスタッフが皆様をお迎えできることでしょう。おっと、もちろん内容もバージョンアップさせていく予定。ぜひ、一緒に、セクシュアル・ヘルスに取り組んでいきましょう!今年度の受講生の皆さん、ありがとうございました。

◆参加感想文

「私にとっての『セクシュアル・ヘルス・ライツ』とは」

北陸 HIV 情報センター 代表 今井 由三代

私は、1991年にメモリアルキルト(HIV/AIDSという病気で亡くなられた方々の人生を記録した布)に出会い、HIV/AIDSと云う病気から、自分のセクシュアリティー(性と生き方)に向き合うチャンスを得ました。その後、北陸でエイズ電話相談に関わり、現在は北陸三県の病院、保健福祉・厚生センターと連携を取りながら、感染された当事者の方や家族、パートナー、友人が安心して治療や生活出来るよう、支援活動への関わりを持っています。又、学校や健康福祉センターなどの依頼によって「健康な性と生を生きる」をテーマに、STD・HIV/AIDSという病気から私自身が学んできたことの出前の講座を持たせてもらっています。

さて、今年度のこのセミナーにすべて参加しました。今回は「セクシュアル・ヘルス・ライツという視点」「セクシュアルヘルス・ライツをめぐる社会資源とネットワーク」「セクシュアルメディアリテラシー」の三本の柱があり、それらを生かすための講義とワークショップとグループワークなどを組み合わせた充実した時間でした。

私の中での性教育の原点は何かという確認をする事が出来ました。健康な性と生を生きるための学びの中に、セクシュアリティー、メディアと情報といったことを、私自身がどう感じていくのか?と云うことが問われました。例えば、「性と生の健康」といってもいわゆる教育ではない。性に関心のある年齢の人達をケアする視点や、年齢に合わせた情報提供が大切で、それによって、自分自身が健康管理し、自己決定していく力を引き出されていくのだと思いました。場面と個人をケアする視点と、具体的に丁寧にユーモアを交えて明るく伝えていくことも大切なのだと学びました。

自分を大切に生きたいという願いは、伝えたい人達にも繋がっていくことだと確信しました。性とは、人権という視点です。「人を大切に」「自分を大切に」「相手をも大切に」。学校で生徒さん達に伝えていくときの、大切な視点だと感じました。

今回どのプログラムにも、グランドルールにもとづき、私自身の存在をとて大切にさせて頂きながら参加させて頂きました。自分自身を知り、開示すること、周りの人達とどうコ

ミュニケーションを取り連携できるのか?その為には内なる自分にゆっくり出会うと云う事も大切な自己ワークだと思います。そこから見えてきたものは、「セクシュアル・ヘルツ・ライツ」とは、決して一人で行うものではなく、いろいろな人達とネットワークを構築しながらつくられていくものだと思います。健康な人生を生きるための、ケアする視点、される側の視点にも結びつくものではないでしょうか。

日常の多忙からぬけだして、このセミナーに参加することで、自分自身がより深く豊かになります。皆さんも機会があれば是非参加してみてください。

「性教育のための実践セミナーに参加をして…」

富樫 征之

私は今回のセミナーに、アシスタント・スタッフとして参加しました。その中で特に印象に残ったのは、「参加者(=実践者)の焦り」を感じたことです。参加者の方々から「実際にどのようにして、性教育を行えば良いのか分からない。」という意見もあり、セミナーに対しては、性教育を行うための具体的な手段を求めていたように感じました。

セミナーの中では、その手段は取り扱われてはいないように思いました。セミナーの目的は、「セミナーの中で、『自己の性の捉え方』や『性を取り巻く状況』を考え知ること、参加者が基本的(=重要)な考え方を見直し、一人一人がその手段を見出していくこと」であったように思います。その焦りから、手段を見出すまでの困難さを抱えながらも、参加者の表情から焦りが消えていった様子にも思いました。

私も同じように考え方を見直すことで、「性とは、一人一人違って当たり前であり、また考えているよりも広いものであった。」と感じました。参加者の方々も、同じように感じ、これからの性教育を行っていくためには何が必要なのか、それを考え続けることが大切であることに気がついたのではないのでしょうか。

「性教育セミナー感想文」

金井 多恵

「性」を今までこうだったからと安易に取り上げることは難しくなってきたと感じることが多く、どんなふうに伝えたいのか自分なりの視点を持ちたくて8月と2月のセミナーに参加させていただきました。

セミナーでは「気づき」という言葉が印象的でした。私自身、自分の持つ「性」のイメージや、「性教育」に自分で勝手に枠をはめていることに気づいたり、自分の思いを一方向的に伝えプレッシャーを与えるだけになっていたのではと、ハツとしたり。いろいろな気づきがありました。

今、保健師としてエイズを含む性感染症の予防活動に取り組む際に、こちらが対象と考えている一人一人の行動は、本人の思いだけではなく、周辺のいろいろな状況に影響を受けていること、「主体は誰なのか」「誰の思いなのか」を意識するように心がけています。他にもまだ言葉にできていない漠然とした思いもありますが、自分なりの表現を自分のペースで見つけていければいいんだということが、今回学んだ視点ではないかと思っています。

充実した体験をさせていただき、スタッフの皆様、ありがとうございました。



コンドームバレー

「HIV陽性者とその仲間たち」のためのホームページweb NESTは、1999年12月1日に少しのコンテンツで始めてから5年以上がたち、大きなサイトに成長しました。より快適に利用してもらえるように、3月12日にリニューアルしました。web NESTに関わる様々な立場から改めてこのサイトを紹介します。

「web NESTを振り返って」

web NEST 運営委員 はらだ

「ウェブのことなど何も知らない、はらださんがネストの利用者と一緒にホームページを作るというのがいいんだよ。」と言われてその気になり、立ち上げてしまえばおしまい!と思っていたら、大間違い。更新していくのが大変なんだと気がついたのは、オープンしたあとでした。

1999年にオープンしたときのコンテンツは3つ。2000年に「リンク集」「掲示板」「よくある質問集」が始まり、2001年に「編集後記」、2002年には「みんなの日記帳」が始まりました。

今の「web NESTらしさ」ができていくまでにはいろいろな出来事がありました。「よくある質問集」を始める時、最初は相談員が答える形式を考えていました。それが、複数の陽性者の回答集にしようよということになり、この時に陽性者の視点に立ったホームページづくりという、web NESTの基本姿勢ができたのだと思います。また、リンク集も当初は厚生省(当時)が上にあっただのですが、あるとき、ピアのサイトなんだから、陽性者やパートナーのページが先じゃないかということで、今のようになったのです。「みんなの日記帳」が加わったのも大きな出来事でした。疑問、質問にだけ応えるのではなく、陽性者の日常が伝わることで、バランスのとれたホームページになったと、その存在の大きさを改めて感じています。

web NESTは、個人のサイトと違い、合議制で進めているのでフットワークが軽いとはいえません。山あり谷あり、関係者も入れ替わりがありました。熱心な運営メンバーと強力な助っ人、質問集の回答者や、日記帳ライター、そして多くの利用者の方々に支えられてここまでできました。

今回のリニューアルでは、利用上の注意を明示した上で、扉をなくしました。web NESTを必要としている人やHIVに肯定的関心のある人がアクセスしやすい、より開かれたサイトにしようという試みです。課題はまだ山積みですが、これから一つずつ積み上げていければと思っています。

「さまざまな思いを持っている方の場所を繋ぎ続けること」

web NEST 運営委員 bukki

私が運営委員になってから約二年半が経ち色々な方とリンク集を通して知り合うことができました。始めのうちは自分自身の作業でなかなか相手先のことを考えられなく、いたって事務的なやり取りでしたが、ある陽性者の方に「事務的で少し連絡しにくい感じでした。」と言われたときに、自分がやっていることはその方たちにとってはとても大きい存在なんだと気がつき、もっと人間らしさ《心》が必要なんだと改めて実感しました。

それからは必ず自分自身から出てきた感想や思いを依頼時には書くようにしました。それ以来ただリンクの依頼をしていたときよりコミュニケーションが取れるようになり、私も楽しく作業が出来るようになりました。インターネット、メールのやり取りと一見すると冷たい言葉に聞こえてしまいがちですが、そこに込められている思いが今ではよく伝わるようになりました。

今の生活が大変な方、他の方にも勇気や出来るということを伝えたい方、さまざまな思いをつなげるリンク集はホントにすばらしいものだと思います! まだまだやるべきことやらなければならないことはたくさんありますがこれからも多くの方の思いを繋ぎ続けていきたいと思っています。



「web 上でのピア・サポートという試み」

web NEST 運営委員 矢島 高

「なにか自分にできることはないか」そう考えている陽性者たちが実は大勢いることを、web NESTを通じて知りました。web だからこそその匿名性と、当事者だからこそそのリアルさを両立させるための工夫をすることで、多くの当事者がweb上で経験を共有することが可能なのだということがわかりました。HIVの治療方法だけでなく、通信技術の変化が、陽性者の21世紀の生活を変えていくことになるのかも知れません。

「よくある質問集」では、約70名ほどの陽性者たちが書いた360のアンサーを掲載しています。そこには一つの正解はなく、回答者の数だけの事実が並んでいます。このリアルリティが、陽性者と仲間たちの役に立つことを信じていると同時に、「エイズは他人事」と思っているたくさんの人たちにも届くことを期待しつつのリニューアルです。

新しい一歩を踏み出したweb NESTをどうぞよろしくお願います。

「『みんなの日記帳』を書き続けて」

みんなの日記帳ライター つばさ

『みんなの日記帳』に日記を書き始めてから、約二年半になる。毎回、書きたいことを書きたいように書いているのだけど、あらためて自分の書いたものを読み返すと、「わたし」の2年半の人生が見えるようでちょっと感慨深い。

これを書き始めて、今の自分の生活にHIVが占める割合は意外と低いんだと実感した。感染がわかったころにこの日記を書いていたなら、2回に1回、あるいは毎回、HIVのことだったかもしれない。HIVに限らず、恋をしているときはそのことばかり考えていたから、そのことばかりになっただろうし、人生にはいろんなステージがあるんだな。

そして、それは一人一人違うんだと、他の人たちの日記を読んで感じる。HIVに感染しているということは同じだけど、みんなさまざまな生活を送っている。『HIVとともに生きる』っていうのはこういうことなんだというのが、『みんなの日記帳』を読むだけで実感できると思う。

…と、なんだか自画自賛になってしまったかな。最近、面白いことがあると「これは日記のネタになるな」と考えてしまうわたし。これからもなるべく自分の生活や想いを楽しみながら書いていきたいと思っている。

「web NEST について思うこと」

都立駒込病院 医師 今村 顕史

web NEST のリニューアルおめでとうございます。

ぶれいす東京、ネスト、そしてweb NESTのこれまでの活動を見てきた医師として、時間の流れを感じ感慨深く思っています。

今まで HIV 感染症診療に医師としてたずさわること、多くの HIV 陽性者、あるいはパートナーや家族と接してきました。HIV 感染症といっても、それぞれの人の状況は様々です。本人の陽性告知までの状況や環境などもそれぞれ異なり、知りたい情報も違ってきます。そんな中でもよく尋ねられることが、他の人たちはどうしているのだろうかということです。これまで、ぶれいす東京やネストに関わることで、そのような問題を解決し、表情の明るくなっていく HIV 陽性者の方も多く見てきました。この機会をお借りして、医師を代表し(勝手に代表していいのだろうか?)心から感謝したいと思います。

しかし、実際にこのような活動を知り、参加することができるようになればいいのですが、中にはまだ直接会ってお話するということができない陽性者の方も多くいます。また地方にいと、なかなか会に参加することもできない人がほとんどであり、そのような会があるという情報さえも入手できないというのが現状でしょう。私は、この様な人たちにとって web NEST はすばらしい情報源だと考えています。陽性者のニーズ、それを支えてきた人たちの工夫などによってコツコツと積み上げられて創られてきた web NEST は、多くの陽性者にとって、なににも代え難い情報源となり、こうしている間にも多くの陽性者の支えになっているのだと思います。

これまでの、そしてこれからの、多くの陽性者の方々のために web NEST の今後のさらなる活動を応援しています。がんばってください。

「web NEST に会って」

FOLLOW 村上 仁

web NEST との出会いは3年前の9月だった。大阪という場所で感染が判明した僕には、病院以外に何の情報も得ることができない中、ネットだけが他の陽性者の情報や意見を知る術だった。

「東京はいいな…」それが web NEST を見たときの正直な感想である。他の陽性者との意見・情報交換の場の提供、当事者の声がかかる質問集や日記、ネット上だけではない生の声を聞ける PGM も案内されている。全てが僕にとっては羨ましく思え、そして関西にはこういう場がないことが悲しくはがゆかった。

関西にこういう場を提供してくれる場や、やろうとする人はいないのだろうか? そんな疑問を持ち続けて模索していく中、関西でもそういう場の提供を求めている人が多いこと、それは当事者だけでなく医療従事者ですら、誰かがそれを始めてくれることを期待していることを知っていった。

そして僕は僕と同じようなことを思い考えてた人達と一緒に、昨年、関西を中心に活動する「FOLLOW」という団体を立ち上げた。あの3年前に、web NEST に出会えなかったら、他の陽性者の人がどうしているか、この問題はどのようにしているのか、そんなことを知る術もなく今でも一人で思い悩んでいたかもしれない。そして何より自分で団体を立ち上げようなどとは思わなかっただろう。

今度は「FOLLOW」にアクセスしてくる人達に、自分達が手を貸してあげられたらと思う。それがまたその人が自分らしく生きていけるきっかけになっていけば…そう願っている。3年前の僕が web NEST と出会ったあのときのように。

※ FOLLOW のサイト <http://www.follow-web.com/>

「READING」 @dista

大阪のゲイ・コミュニティの HIV 啓発センター「dista」にて、3月19日にリーディング・イベントが行われました。陽性者やその周辺の人たちの手記7編が、さまざまな読み手によって再発信され、40名以上の来場者と大きな共感の場を共有した夜となりました。(共催: MASH 大阪、FOLLOW、ぶれいす東京)

「READING に参加して」

FOLLOW Mie

今回初めて READING に参加した。READING の話はこれまでも聞いていたし、FOLLOW も手記を集める協力をした関係で、その企画の主旨や内容は頭では解っているつもりだった。でも、READING って実際にはどんなことが起こるのだろうかという気持ちで dista へ向かった。

床に敷きつめられたクッションに座り、「社会に既存している単語では言い表せない自分にとって大切な関係」かー、と展示会をされていたブブさんの言葉と自分の人との関わりを考えめぐらせているところで、いよいよ1人目の読み手が現れた。

HIV 陽性者やその周りの人が書いた手紙を、それぞれの持ち味で淡々と、でも心を込めて声にする。まず読み手の一生懸命さに聞き入る。書き手とは別の人を通してその手紙に込められた想いを耳にすることはとても新鮮だった。そして読み終えた手紙に関して読んだ本人が個人的な感想を述べる。自分の感想と比較して、ひとつの手紙でも人それぞれ感じることは違うんだなー、と当たり前のことを実感する。自分の想いを来場者になんとか伝えようとする読み手の姿にも

感動した。自身の経験を含めて、手紙の感想を語る読み手もいた。今おかれている人生の地点から見たその人ならではの感じ方があるのかなと思った。ひとりひとり、汗だくになって(ライトが熱かったのもあるみたい)、そして、読み手がマイクから離れていく。



「dista」

友達への想い、子への想い、親への想いなど、HIV 感染というものを超えた、いや HIV を通しているからこそわかりやすくなっているのかもしれないけれど、人と人との関係やつながりを感じることができたと同時に、深く考えさせられた時間だった。誰かに宛てた想いを表現できることってすばらしいことだと思った。痛みを伴ったかもしれないけど。でも、こうして別の人が読み手として何かを感じ、それを聞いた人がまた何かを感じ… HIV 陽性者やその周りの人の生身の声が水溜りの輪のように広がっていく瞬間をみた気がした。「私の周りにはまだいないからよくわからないけど…」という人が減っていけばいいなあ。

WAVEさっぽろ2005

札幌市の委託を受けて結成されたゲイバーのマスターのグループ S.M.A が HIV 啓発イベントを行いました。3月21日、すすきの女装系ショーバー「ららっ」にて、新しい啓発イベントが札幌でスタートしました。
(WAVE さっぽろ web サイト <http://www.wave-sapporo.com>)

2月中旬。雪が降るなか、札幌での就労の研究成果発表会の後、拠点病院の看護師2人と共にダンガリーというゲイバーに行った。そこで3人は、WAVE当日に配布される冊子のドラフトを見せてもらった。地元の札幌のゲイバーのマスター15人とデザイナーが準備をしているという。冊子には、それぞれの店のお客さんのアンケートの結果、HIVに関する情報などが、マスターたちの楽しい写真付きで載っていた。

その中の一人 HIDEKI さんは、「8年前くらい前まではそんなにHIVの事を深刻には考えてなかったけど、お客様や友達の中にも『+』の人たちがでてきて、とうとう札幌にも…って感じで深刻さがじんわり浸透してきました。でもやっぱ心に残るのは数年前の“とある死”でした。HIVが良いとか悪いとか、そんなことが言いたくて啓発活動やってるんじゃないかと、あのときの気持ちに誰もなっていて欲しくないだけ。」と動機を語る。

そんな思いを共有するマスターたちが、週に5日ミーティングを重ねて準備をしてきたという。マスターたちからお客さんへの愛あるメッセージがWAVEの原点である。(生島 嗣)

HIV 啓発イベント「WAVE」に参加して

yoshi

このようなイベントの参加は初めてだったので、とても楽しみにしていました。内容も盛りだくさんで、豪華メンバーのパネルディスカッションやショーもあり、涙あり笑いありですごく楽しめる物だったと思います。

パネルディスカッションでは、保健所の方や看護師さんなど、様々な立場の方からのお話が聞けてちょっと得した気分です。後半に、Living Together Lettersの中から2つの朗読と喜美組さんのライブで涙が止まらなくなってしまいました。最後は出演している方も含め、お客さんでも目頭を熱くしている人がたくさんいました。こういう機会を設けることによって、改めてHIVの事を考えさせられるし、考えてみるキッカケになるイベントになったのではと思いました。

是非次回につなげて欲しいし、もっとたくさんの人に見てもらいたいです。

活動報告他

— 各部門より —

ホットライン

エイズ電話相談 (ぶれいす東京および東京都委託)

◆ホットライン・ミーティング他実施状況 ()内は出席人数

1月

- 14日 東京都電話相談連絡会 (4名)
- 16日 世話人会 (6名)
スタッフミーティング/ケースカンファレンス (17名)
- 27日 平成16年度HIV/AIDS症例懇話会 (6名)

2月

- 4日 東京都電話相談連絡会 (3名)
- 13日 臨時世話人会 (6名)
- 27日 世話人会 (6名)
スタッフミーティング/自主勉強会 (17名)
追加部門研修 (スタッフ2名/研修生1名)

3月

- 7日 エイズボランティア講習会 (9名)
- 11日 東京都電話相談連絡会 (3名)
- 12日~ 研修生モニタリング/実地研修
- 27日 世話人会 (4名)
スタッフミーティング/新人交流/
ケースカンファレンス (12名)

◆相談実績報告

— ぶれいす東京エイズ電話相談 —

| | 1月 | 2月 | 3月 |
|-----------|------|-----|-----|
| 日数(日) | 4 | 4 | 4 |
| 総時間(時間) | 16 | 16 | 16 |
| 相談員数(のべ人) | 6 | 4 | 5 |
| 相談件数(件) | 42 | 27 | 22 |
| うち(男性) | 35 | 22 | 20 |
| (女性) | 7 | 5 | 2 |
| (陽性者) | 0 | 0 | 0 |
| 1日平均(件) | 10.5 | 6.8 | 5.5 |

— 東京都夜間・休日エイズ電話相談 — (委託)

| | 1月 | 2月 | 3月 |
|-----------|------|------|------|
| 日数(日) | 12 | 12 | 12 |
| 総時間(時間) | 12 | 36 | 36 |
| 相談員数(のべ人) | 29 | 29 | 28 |
| 相談件数(件) | 286 | 243 | 207 |
| うち(男性) | 243 | 193 | 180 |
| (女性) | 43 | 49 | 27 |
| (不明) | 0 | 0 | 0 |
| (陽性者) | 0 | 0 | 5 |
| 1日平均(件) | 23.8 | 20.3 | 17.3 |

前任者から引継ぎ、この3ヶ月間HL部門の活動を見てきましたが、内容の大きなウエイトを神経的な問題を抱えている相談が占めていると感じました。相談員のストレスを少しでも軽減する方法を考えなければならないと思っています。相談内容

は感染不安が中心ですが、昨年9月から東京都で導入された「抗原抗体検査」、あるいは迅速検査が拡がりをみせる中で、検査に関する相談も多く寄せられました。勉強会などでスタッフのスキルアップを図り、更に充実させていきたいと思っています。
(報告者：佐藤)

ぶ☆PEP

若者による若者のための予防啓発活動

★ミーティング () 内はぶ☆PEP 参加人数

- 2月 10日 定例ミーティング (5名+生島)
- 2月 19日 クリニック見学 (4名+兵藤)
- 2月 24日 ピアプログラムミーティング@青山高校
(2名+生島+兵藤、高校教諭2名+保健所2名)
- 2月 27日 ピアプログラムミーティング (3名)
- 2月 28日 ティーンズクリニック臨時ミーティング@事務所
- 3月 6日 ティーンズクリニックミーティング
(2名+兵藤、生島)
- 3月 7日 ティーンズクリニック勉強会 (6名+兵藤+講師:池上)
- 3月 9日 ピアプログラムミーティング (2名)
- 3月 10日 ピアプログラムミーティング (3名+兵藤、生島)
- 3月 11日 ピアプログラムミーティング (3名)
- 3月 13日 ピアプログラムミーティング (2名)
- 3月 18日 ピアプログラムミーティング (2名+兵藤)
- 3月 30日 ティーンズクリニックミーティング
@クリニック (2名+兵藤)

★ピアプログラム実施状況

- 3月 22日 都立青山高校 対象:1年生280名(2名+兵藤)
- 3月 23日 都立青山高校 対象:2年生280名(2名+兵藤)

★その他

- 1月 23日 新年会@新宿 (4名+外部2名)

★相談メール件数

- 1月 9件 (女9件 男0件 不明0件)
- 2月 10件 (女9件 男1件 不明0件)
- 3月 4件 (女3件 男0件 不明1件)

3月には久しぶりに高校でピアプログラムを実施してきました。プログラム実施経験のない新人さん2人がかなり頑張ってくれ、学生からのレスポンスも良いものが多かったようです。また、現在、銀座の某女性向けクリニックの「ティーンズ外来」プロジェクトに4月から協力する予定で、そのミーティングに追われています。
(報告：柳田)

バディ

陽性者のための直接ケア・派遣プログラム

◆バディ担当者ミーティング参加スタッフ数

- (第1木曜 11:00～ 第3木曜 18:30～)
- 1/6 3人 1/20 7人
 - 2/3 3人 2/17 3人
 - 3/3 5人 3/17 6人

◆利用者数

5カ所の病院に通院中、もしくは入院中の17名の方に20名のバディスタッフを派遣。

◆訪問先 (2005/3月末現在)

- 在宅訪問 14件 病室訪問 2件
- 在宅への電話のみ 1件

◆派遣調整

- 追加派遣 3件

◆バディ担当中のスタッフ構成 (3月末現在)

女性12名 男性8名

◆バディの現場から

3月27日(日)のぶれいす東京主催のお花見にバディ利用者の方が3名参加し、担当バディが移動時の介助を行いました。ご協力いただいたバディの皆様ありがとうございました。年度が変わり、転居や移動等で活動状況に変化のあったバディの方はぜひご連絡下さい。今後ともご協力いただけますようよろしくお願いいたします。
(報告：牧原)

ネスト

陽性者とパートナー・家族のためのスペースとプログラム

◆ネスト利用状況

| | オープン日数 | 延べ利用者数 | (うち新規) (*ファシリテーターなど) | |
|----|--------|--------|----------------------|-------|
| 1月 | 23日 | 129名 | (7名) | (9名) |
| 2月 | 27日 | 124名 | (5名) | (4名) |
| 3月 | 28日 | 140名 | (4名) | (10名) |

(*はファシリテーター、web NEST 運営委員、お茶会、講習会などの企画・運営などの役割を担っているネスト利用者)

◆ピア・グループ・ミーティング (PGM)

- ・新陽性者 PGM 第21期 (参加者6名)
1/15 1/29 2/11 2/26 (修了)
- ・新陽性者 PGM 第22期 (参加者5名) 3/10 3/24
- ・陰性パートナー・ミーティング
1/8 (3名) 2/12 (4名) 3/12 (2名)
- ・ミドル・ミーティング
1/8 (3名) 2/12 (6名) 3/12 (8名)
- ・カップル交流会 1/9 (14名)
- ・もめんの会 3/25 (3名)

◆学習会/イベント

- ・3/7 ストレス・マネジメント講座 1 (参加者5名)

◆ミーティング (陽性者メンバー、ぶれいす東京スタッフ)

- ・新陽性者 PGM ファシリテーター・ミーティング
1/6 (5, 5) 3/8 (4, 4)
- ・新陽性者 PGM マニュアル検討会 3/31 (2, 2)
- ・web NEST 運営委員会
1/19 (2, 2) 2/21 (3, 2) 3/17 (2, 2)

◆ネスト・ニュースレター

1/17 1月号、2/14 2月号、3/11 3月号発行

◆新陽性者 PGM 効果評価ミーティング終了

第22期より新アンケート開始。新たに新陽性者 PGM マニュアル検討会がスタートしました。

◆web NEST がリニューアル・オープン!

3月12日(土)、web NEST がサイトも新たにリニューアルオープン。詳しくは7～8ページをご覧ください。
(報告者：はらだ)

Gay Friends for AIDS

ゲイによるゲイ・コミュニティ向け活動
<http://gf.ptokyo.com>

◆Gay Friends for AIDS 電話相談

- 1月 11件 (平均2.75件)
- 2月 14件 (平均3.5件)
- 3月 11件 (平均2.75件)

◆聴覚障害者団体 JRDC への学習会に講師派遣

2月19日 於：スマイルなかの

スライドや手話通訳の助けを借りて、「聞こえない」ということに対応したものの質疑応答では悪戦苦闘。色々と課題が見えた学習会でした。

◆福岡LAFのイベント colors に手記集とLiving Together LETTERS を提供 2月25日

◆MASH大阪、FOLLOWと共にリーディングイベントを開催 3月19日 詳しくは8ページ

◆札幌のバーのママ達によるイベントWAVE2005のリーディングに協力 3月21日 詳しくは9ページ

◆Living Together Lounge に協力
3月21日 於：advocates tokyo

◆韓国エイズ予防財団との交流
3月24日 於：ぶれいす東京

◆仙台のイベントにて「POSITIVE VOICES」の上映
3月20日

◆ミーティング開催 (1/7、2/19、3/5、3/26)

◆コメント

VOICE'04で完全燃焼したスタッフのエンジンをそろそろかけて、今年も様々な形でHIV/AIDS予防啓発に努めて行きたいと思えます。(文責:タカシ)

HIV陽性者への相談サービス

◆相談実績

| 2005年 | 1月 | 2月 | 3月 |
|-------------|----|----|----|
| 電話による相談 | 49 | 40 | 54 |
| 対面による相談 | 34 | 31 | 19 |
| E-mailによる相談 | 81 | 54 | 70 |
| うち新規相談 | 12 | 14 | 15 |

◆新規相談者の属性 (N=41)

HIV陽性者 (男性:36 女性:2)
親 (女性:2)、友達 (男性:1)

◆新規来訪者情報源 (N=41)

Web:8、ゲイ雑誌:1、行政冊子:1、他陽性者:4、パートナー:1、元彼:1、息子:2、友達:2、元々知人:1、南新宿:3、医療機関外来:1、保健所:2、コーディネーターナース:1、医師:1、PSW:1、電話相談:1、他NPO:2、不明:8

◆新規相談者の相談内容

【告知直後の相談】病院えらび/告知直後の混乱/HIV陽性者・元彼・親・友達からの相談/迅速検査後の確認検査待ちの不安/一般医療機関での術前検査による陽性告知後の混乱/海外で生活中の検査での陽性結果

【治療】服薬開始/薬剤耐性があった/医療とのコミュニケーション/リポジストロフィーについて医師があまり対応してくれない/告知後、医療機関にいない

【心理】心理的な不安/ひきこもり/妄想と想像される語り/大量服薬/引きこもりがち/英語で相談ができる場所

【社会生活】仕事復帰への不安/職場での感染告知/なにか自分にできること/生活保護に関する相談

【ミーティングの参加希望/問い合わせ】新人PGM/他の女性陽性者と会いたい/40代ミーティングに参加希望

【人間関係/セイファーセックス/プライバシー/他】女性にとってのセイファーセックスについて/息子のパートナーが陽性者/パートナーが欲しい/陽性告知後、カップル間の人間関係/健康保険や職場での情報のながれ/薬物のこととHIV感染

(報告: 牧原/生島)

研究部門

厚生労働省委託 厚生労働科学研究

■「HIV感染予防対策の効果に関する研究」(2003年度一)

人材育成事業として2月5日(土)、6日(日)の2日連続にて、「性教育のための実践セミナー」を(財)日本性教育協会と実施、両日とも定員を上回る応募を得ました。詳しくは、p.5~6をご参照下さい。また、「HIV陽性者から周囲の人への陽性告知が予防行動にもたらす影響」をテーマに、陽性者の男女数名へのインタビュー調査及び主にゲイ男性を会員層とするポータルサイトと協力したWeb調査を行いました。Web調査においては、422名の方から回答を戴きました。

こうした調査や、既に2004年12月までに行った調査(オリジナルビデオ教材の効果評価調査、ピア・アプローチの実態とニーズ調査、自治体における若者の性に関する健康・権利についての政策・事業実態分析調査)の結果をまとめ、2004年度の研究報告書を作成しました。尚、当研究班は2005年度も引き続き研究を継続します。

■「HIV感染者の地域生活支援におけるソーシャルワーカーの連携に関する研究」(2003年度一)

「HIV感染症の医療体制に関する研究班(厚生労働科学研究)」の中の「HIV感染者の療養生活と就労に関する研究」の研究結果を、分担研究者の小西加保留教授(桃山学院大学)に協力して、色刷りのパンフレットにまとめました。当該パンフレットは下記、「エイズ予防財団助成 研究成果発表会」等の場にて来場者の方々等に頒布しました。

(財)エイズ予防財団助成 研究成果発表会

■「地域で働く仲間としてー HIV陽性者の就労支援について」

昨年11月の大阪、福岡に続き、2月13日(日)北海道大学学術交流会館(札幌)、3月11日(金)ハイライフプラザいたばし(東京)にて、「HIV感染症の医療体制に関する研究班(厚生労働科学研究)」の中の「HIV感染者の療養生活と就労に関する研究」の研究成果発表会を、分担研究者の小西加保留教授(桃山学院大学)に協力して、開催しました。当日は研究班の他、医師、コーディネーターナース、医療ソーシャルワーカー、陽性者、人事担当者などの方にご講演戴き、両発表会合計で150名近くの方々にご来場戴きました。詳しくは、p.2~4をご参照下さい。(報告者: 吉田)

祝 生島嗣 PWA賞受賞

「エ? まだだったの?

遅いよー!」という声

が聞こえてきそうですが、

われらの生島さんが

昨年度のPWA賞を受賞

しました。かんばー

い!! 「PWA賞って

なに?」という方もいる

かも。エイズ関係コミュニティが毎年1回厳正なる

審査を行いコミュニティに多大な貢献をした人にし

か絶対にあげない! という「権威はないが名誉ば

つぐんの賞」なのです。そもそも行政がポスターに協

力というだけで有名人を表彰しちゃうりするから、

コミュニティの意地を示してる賞でもあります。「み

なさまと共に受賞」生島さんの受賞受諾の言葉。おめ

でとう!! (池上)

PWA賞についてはAIDS&Society研究会議のホームページをご覧ください。http://www.asajp.org/



特定非営利活動法人 ぷれいす東京

第5回総会・活動報告会のご案内

恒例の総会・活動報告会を今年も開催します。各部門の報告では、普段の活動の現場感覚あふれた発表をお届けします。多様なスタッフの登場が活動の広がりを感じさせてくれます。皆様、ぜひご参加ください。

今年のゲストコーナーのテーマは「LIVING TOGETHER」です。詳細は準備中ですが、確定次第、ホームページなどでお知らせする予定です。どうぞご期待ください。

代表 池上千寿子

日時 2005年5月28日(土)

総会 13:15～13:45

* 総会の議決に参加できるのは正会員のみです。活動会員、賛助会員の皆様も総会にご出席いただけますが、議決権はありません。あらかじめ、ご了承ください。

活動報告会 14:00～16:30 どなたでも参加可能です

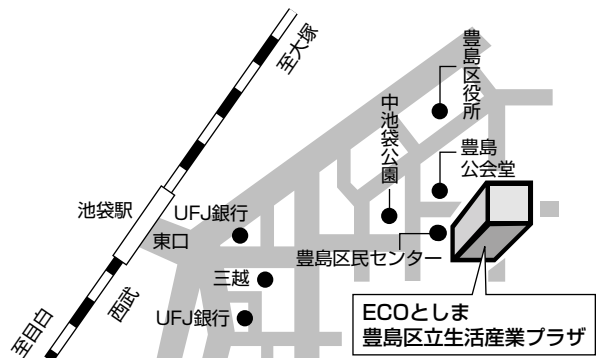
* ぷれいす東京の会員・賛助会員・寄付者・ネスト利用者・招待者は無料。それ以外の方は、資料代として1000円いただきます。

会場 ECOとしま 豊島区生活産業プラザ多目的ホール(8F)
豊島区東池袋1-20-15(池袋駅東口より徒歩7分)
TEL:03-5992-7011

- * 詳細はホームページ等でご確認ください
- * 活動報告会の終了後に懇親会が開催されます。どなたでも参加可能です/会費制
- * 当日の連絡は下記の携帯までお願いいたします
ぷれいす東京携帯電話 090-6310-8981(昼12:00～)

【活動報告会プログラム】

- ・あいさつ
- ・部門報告
ホットライン、ぷ☆PEP、パディ、ネスト/PGM、Gay Friends for AIDS、HIV陽性者への相談サービス、研究部門、事務総務
- ・ゲストコーナー(詳細準備中)



■ ぷれいす東京より 賛助会員入会・寄付のお願い

HIV陽性者の数は年々増え続けています。新たな治療法は開発されていますが、治療を続けながら生活する上では様々な問題が発生しています。HIV陽性者とその周辺の人たちへの支援、コミュニティとして取り組んでいる予防活動、私たちの活動へのニーズがますます高まっており、必要な運営資金も増え続けています。よりよいサービスやプログラムを継続するために、ぜひ私たちの活動を応援してください。

賛助会員入会のお願い

継続して応援して下さる方は賛助会員になってください。

--- 賛助会員になるには? ---

メールか電話/FAXで賛助会員入会をお申し込みください。折り返し、ぷれいす東京の案内と賛助会費専用の振込用紙をお送りします。

E-MAIL info@ptokyo.com

電話 03-3361-8964 FAX 03-3361-8835

年会費 個人賛助会員 (一口) 1万円

団体賛助会員 (一口) 10万円

寄付のお願い

そのほか随時寄付をお受けしています。ぷれいす東京の活動をぜひともご支援ください。ご寄付はいくらでも結構です。匿名でも可能です。

--- 寄付の振込み方法 ---

◇ ぷれいす東京の活動全般に対する寄付

郵便局 郵便振替口座 No.00160-3-574075

特定非営利活動法人 ぷれいす東京 代表 池上千寿子

銀行 三井住友銀行 高田馬場支店 普通 2041174

特定非営利活動法人 ぷれいす東京 代表 池上千寿子

◇ HIV陽性者への直接支援活動「ネスト/パディ」への寄付

銀行 東京三菱銀行 高田馬場支店 普通 1314375

特定非営利活動法人 ぷれいす東京 代表 池上千寿子

◇ Gay Friends for AIDSの活動への寄付

銀行 みずほ銀行 高田馬場駅前支店 普通 5507255

特定非営利活動法人 ぷれいす東京 理事 生島 嗣

編集後記

- ・お土産でもらった古代米。説明書通りの分量で炊きました。炊飯器の蓋をあけると…? 初めて食べました紫色のご飯(こんどう)
- ・恒例の「お花見」が今年も70名近い大宴会。開花予想をまったく無視しての「お蕾見」でしたが、好天に恵まれて盛況でした。それにしてもこの多彩な面々、ぷれいす東京ならではの。 (やじま)
- ・厚生労働省では、重要な案件が進行中で注目していきたい。①エイズ施策の指針の見直し作業中。池上も委員の一人だ。②知的・身体・精神の3つの障害者の支援制度を統合されようとしている。被害原告の方々の努力で実現された、社会的な支援の水準が変化しようとしている。(いくしま)

編集・発行: 特定非営利活動法人 ぷれいす東京

〒169-0075 東京都新宿区高田馬場4-22-46 ザ・テラス304

TEL: 03-3361-8964 (月-金 12:00~19:00)

FAX: 03-3361-8835

E-mail: info@ptokyo.com

ぷれいす東京HP: <http://www.ptokyo.com/>

Gay Friends for AIDS: <http://gf.ptokyo.com/>

web NEST: <http://web-nest.ptokyo.com>

Sexual Health: <http://shw.ptokyo.com>